

聖学院大学総合研究所 スピリチュアルケア研究主催 2018年度 スピリチュアルケア研究講演会 「哀しみのなかからひかりを——祈り、寄り添い、たましいの救いへ」

2018年度のスピリチュアルケア講演会は、年間テーマを「哀しみのなかから光を——祈り、寄り添い、たましいの救いへ」として、本学にゆかりのある2名の牧師を講師に迎えて開催された。第1回（2018年7月20日）は、聖路加国際病院チャプレンで本学こども心理学科非常勤講師である柴田実先生より「病院チャプレンの癒しの働き」と題してご講演いただき、第2回（2019年2月1日）は、青山学院大学国際政治学部教授・チャプレン、日本基督教団美竹教会牧師で、もと本学人間福祉学部チャプレンの左近豊先生より「哀しみの傍らにあって一聖書に学ぶと祈りの祈り」と題してご講演いただいた。

いずれの講演会にも、医療職、福祉職、病気や障害を抱える人とそのご家族、教員や学生など多数の参加者があった。講演後に設けられた質疑の時間には、両講師とも、さまざまな立場からの具体的な質問に対して誠実にお応えくださり、生老病死にまつわる哀しみのなかにも心癒しを味わうことの尊さと希望を感じさせられる時間となった。

1. 病院チャプレンのはたらき

柴田実先生からは、病院チャプレンの業務内容の紹介とともにスピリチュアルケアの定義の概説と、医療臨床現場に頻発するスピリチュアルペインの具体例について事例を交えてお話しいただいた。先生がチャプレンとして勤務する聖路加国際病院では、外来診療、検査、入院時などに患者から表出されるスピリチュアルペインとして「生きる意味がわからない苦しみ」や「自律性の低下による喪失の苦しみ」が多く、これらに対して医師や看護師からのオーダーによりカンファレンスを経てチャプレンの介入が始まる。

病院チャプレンとしてのスピリチュアルケアの取り組みについて、柴田先生は「生々しい人間の命の問題について常に考えさせられ、自身の無力



第1回講演者：柴田実先生

さや力不足を覚えないことはまずない」と述べられた。そのうえで、スピリチュアルケアとは、人が生きて死ぬことの意味を問い、危機の中を歩き、待ち受ける死を前にしているにもかかわらず、どのように生き得るのかを問い続ける役割、それらを傍らで見守り支え続ける役割であるとの考察が示された。こうした役割を果たすには、単なる臨床技術に留まらず、チャプレンとして、いかに自らの生と死、人生の深い課題に挑戦するかという問題が密接に関わってくる、そこで大切なことは他者への関心、苦しみ相手への愛情であり、そのモデルは真に十字架と復活のイエス・キリストであると結ばれた。

講演のなかでは、緩和ケアの現場で印象に残った患者さんとの対話の一部を、個人情報に配慮しつつ臨場感をもってご紹介くださった。そこには、日々ひとの生き死ににかかわり、自己の存在の消滅に恐れを抱く人々のたましいの震えに呼応する柴田先生のスピリチュアルケアの姿がよく表されていた。具体的に誰にとっても我が事として考えさせられる内容であり、スピリチュアルケアの現場ではたらく人のみならず患者家族など様々な立場の参加者にとって学びの多い講演であった。

2. 教会の牧師のはたらき

左近豊先生は、牧師として仕える教会での印象的な教会員の方（仮称Kさん）との出会いと別れを冒頭で紹介された。深いスピリチュアルペインを抱えたKさんが召されるまでの約3年半について、いくつものエピソードを交えて語られたことで、先生がいかにして祈りながらKさんに寄り添い続けられたかが伝わってきた。隣人のなかにスピリチュアルペインを見出したとき、教会員としてわたしたちに何ができるのか、また聖書のもつ力とはなにかを考えさせられた。

その後、先生のご専門である旧約聖書学の研究に基づき、『創世記』に登場するラケル（Rachel）という女性が、バビロン捕囚に遭い苦しむ民のスピリチュアルペインに寄り添う姿を、『エレミヤ書』の描写を引用しながら説かれた。それは、聖書に見るスピリチュアルケアの一側面として、個人対個人だけでなく、伝承される物語（ナラティブ）に聖書的な共同体のありかたを見出すものである。先生は、人びとの悲しみに寄り添うラケルの姿に託して、共同体としてのスピリチュアルケアがあるといわれる。ラケルは、新約聖書にも引き継がれ、『マタイ福音書』ではクリスマス直後の嬰兒虐殺に嘆く母親たちの嘆きをラケルの嘆きに象徴させて記している。このように、共同体の集まりのなかで嘆きや悲しみを語り、それを受け止め、また自らのうちに刻むいとなみのなかで、いますぐに解決できない悲しみの癒しを次世代に託す発想もあり得るのではないかと、「いま、ここで」を大切にするとスピリチュアルケアについて、聖書をとおして別のとらえ方ができることが示唆された。

また、「感情」とは、生来備わっているのではなく、他者の創った“物語”をとおして学び習得するものである（Martha C. Nussbaum 『Love's Knowledge: Essays on Philosophy and Literature.』 Oxford Univ. Press, 1990 / 山折哲雄・齋藤孝 『「哀しみ」を語り継ぐ日本人』 2003年）。つまり、悲しいという感情も学び獲得していくものであると解説された。

左近先生は、旧約聖書のなかでもとくに『哀歌』を専門に研究されており、講演の後半から質疑応答の時間を使ってその味わい深さについて力強く



第2回講演者：左近豊先生

語っていただいた。言葉にならない嘆きをうたった『哀歌』をとおし、時空を超えて綿々と受け継がれ共有されるひとびとの「哀しみ」に寄り添ってくださる神の存在について、スピリチュアルケアの原型を見る思いで聴衆は聞き入っていた。

2回の講演会を通して、本学の建学の精神である「神を仰ぎ人に仕う」体現ともいえるスピリチュアルケアについて、実践とその背景にあるキリスト教の思想を学ぶ時間を持つことができた。ご講演くださった柴田実先生、左近豊先生と、参加者のみなさまに感謝申しあげる。

（報告者：田村綾子 [たむら・あやこ] 聖学院大学心理福祉学部心理福祉学科教授、同大学総合研究所スピリチュアルケア研究代表）

本

書籍のご案内

お近くの書店、Amazon.co.jpからお買い求めいただけます。


スピリチュアルケア研究

—基礎の構築から実践へ—

窪寺俊之 著

2017年11月20日発行
4,800円（税別）

臨床体験から創出した
スピリチュアルヒストリー法である
「<信望愛>法」を紹介。



聖学院大学出版会 TEL:048-725-9801 FAX:048-725-0324
URL: <https://www.seigypress.jp>